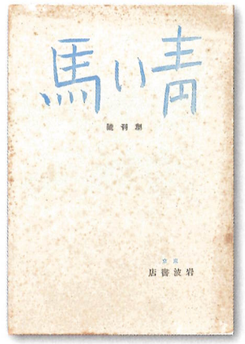
「僕は今、ドビュッシイのやうな小説を書こうと思つてゐます」（坂口安吾「葛巻義敏宛の手紙」より抜粋）

1930年代前半、東京神田。
アテネ・フランセで学ぶ若者たちが編んだ同人雑誌、『言葉』『青い馬』。
安吾のデビュー誌であり、フランス文学と音楽が通底する稀覯誌を、原誌そのままの姿で復刻する。

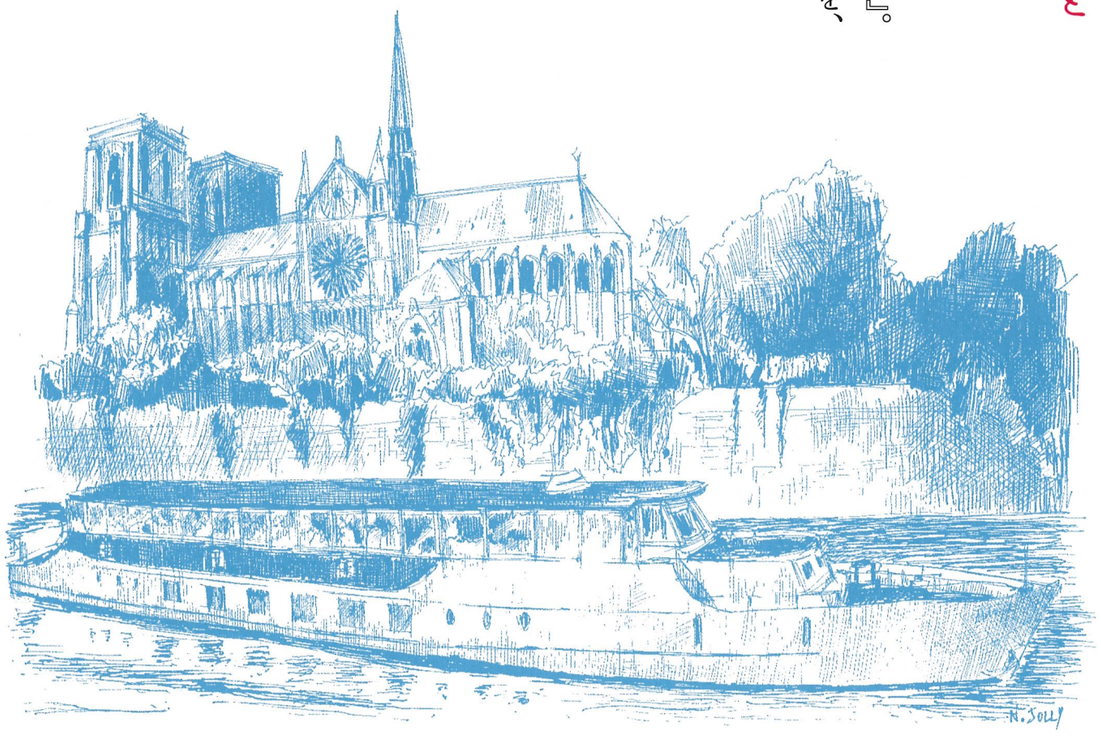
復刻版

青い馬 1930－1932

〈前身誌『言葉』を含む〉
発行所　岩波書店（『言葉』は言葉発行所）



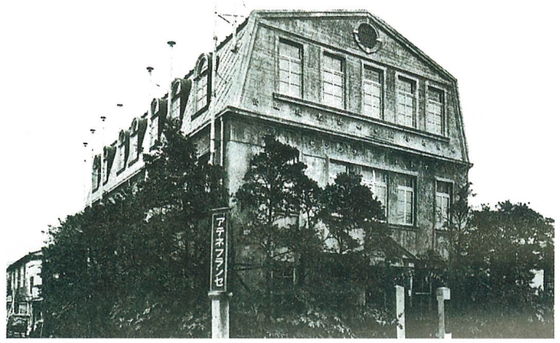
全7冊＋別冊1
◉解　題　浅子逸男〈花園大学教授〉
宮崎真素美〈愛知県立大学教授〉
庄司達也〈横浜市立大学教授〉
◉体　裁　菊判・並製・総約700頁
◉定　価　本体48、000円＋税
2019年6月刊行



三人社

復刻版 **青い馬** 1930－1932
発行所　岩波書店（『言葉』は言葉発行所）

【復刻版概要】
◉解　題　浅子逸男〈花園大学教授〉
宮崎真素美〈愛知県立大学教授〉
庄司達也〈横浜市立大学教授〉
◉体　裁　菊判・並製（化粧函入）・全7冊＋別冊　総約700頁
◉定　価　本体48、000円＋税　ISBN978-4-86691-127-4
※分売不可



執筆者一覧

青山清松　多間寺竜夫
伊藤　昇　鳥海勇作
岩佐　明　長岡輝子
鵜殿新一　長島　萃
江口　清　西田義郎
大沢比呂夫　根本鐘治
太田　忠　菱山修三
小笠原みち子　富士原清一
片岡十一　古谷文子
片山勝吉　本多　信
桂　一　持地竝子
葛巻義敏　山口修三
坂口安吾　山沢種樹
阪　丈緒　吉野利雄
関　義　若園清太郎
高橋幸一　脇田隼夫

関連図書のごあんない

椎の木社刊［1932年～1936年］
第三次 椎の木 全11巻＋別冊1
戦争へと傾きゆく時代に純粋な抒情詩の探究ないし実践の場として在った本誌の志向性は『詩と詩論』と『四季』の時代をつなぐ詩的営為と意義付けられるであろう。
■推薦　國生雅子・澤正宏・山田兼士
解　題／外村彰
体　裁／A5判・上製・総約4、200頁
揃定価／198、000円＋税　全4回配本
2017年7月～2018年9月【復刻版】

博文館他刊［1917年～1937年］
半七捕物帳 初出版集成
全6巻付録つき
本企画では、初出雑誌に掲載された本文と挿画を、発表年代順に収録し、第1巻巻頭に解説を記し、各作品の冒頭には詳細な解題と書誌情報を付して復刻するものである。
■推薦　逢坂剛・浜田雄介・平岡敏夫
解説・解題／浅子逸男
体　裁／B5判・上製・総約2、000頁
揃定価／132、000円＋税　全2回配本
2017年7月～2018年4月【編集復刻版】

三人社
〒606-8316
京都市左京区吉田二本松町4　白亜荘
電話 075-762-0368
FAX 075-762-0369
http://3ninsha.com/

●表示はすべて税別

ご注文は書店様または直接上記までお申し込みください。

刊行の辞

『言葉』二冊と『青い馬』五冊は原誌を見ることが難しい雑誌に数えられていた。この二誌は坂口安吾の初期作品を掲載したことで知られ、安吾評価が高まるにつれて伝説化していったふしがある。たしかに「処女作前後の思ひ出」や没後発表の「青い絨毯」などによってアテネ・フランセ時代の仲間と発刊したことや、そこに葛巻義敏がいたことで芥川龍之介の書斎が編輯の場として使われたことが知られるようになった。そのころを回想したきだみのるは「ひそひそしたメリメの訳者江口清」と安吾の他にも活躍した文学者の名を挙げている。

だが、このたび手元に置いてみると、それだけに留まらない。昭和初期の詩の様相を覗くことができるのだ。菱山修三は言うまでもないが、伊藤昇が曲をつけた本多信の「戦線」が掲載されている。伊藤昇は今日では注目する人も少なくなってしまったが、萩原朔太郎の「題のない歌」や安西冬衛の「騎兵」といった詩に曲をつけている。その伊藤昇も『言葉』と『青い馬』に文章を寄せており、伊藤とともに「新音楽派」のメンバーとなる太田忠も『言葉』に「音楽の横顔」を載せている。中原中也、諸井三郎の『スルヤ』とならべてみると、この時代の詩人や音楽家の目指したものが見えてくる。

〈青い馬刊行会〉

青い馬　創刊號　目次

青　年……本多　信……一
思ひ出（詩）……長岡輝子……一六
硫酸紙の假面……若園清太郎……三
ふるさとに寄する讃歌……坂口安吾……三八
雲を賣る商人……關　義……四七
心の唄（詩）……古谷文子……五一
一　人……葛巻義敏……五五

★

出　發（ピエル・ルヴエルデイ）……本多　信……六五

白い夜々（フィリツプ・スウポオ）……長島　萃……六七

★

望遠鏡を手にして……持地竝子……八一
白鳥の死……關　義……八三

★

ステフアヌ・マラルメ……ポオル・ヴアレリイ……八四
病院のニイチエ……バウマン……八六
「ミスチグリ」（マルセル・アシヤアル）……アンリ・ソオゲ……九四
エリツク・サテイ（譯及補註）……ジヤン・コクトオ……九七

★

詩集「懸崖」……ピエロ傳道者……一一七
編輯後記

原寸内容見本

黒谷村

坂口安吾

矢車凡太が黒谷村を訪れたのは、蜂谷龍然に特殊な友情や、また特別な興味を懐いてゐたためでは無論ない。まして、黒谷村自體に就ては、その出發に先立つて、已に絶望に近いものを感じてゐたのだが、それでも東京に留まるよりはましであると計算して、厭々ながら長い夜汽車に揺られて來たのだ。

夏が來て、あのうらうらと浮く綿のやうな雲を見ると、山岳へ浸らずにはゐられない放浪癖を、凡太は所有してゐた。あの白い雲がうらうらと浮いて、泌むやうな山の季節を感じながら、餘儀ない理由で都會に足を留めねばならぬとき、彼は一種神經的な激しい涸渇を感じて、五感の各部に妙な渇きを覺えながら、不圖不眠症に犯されてしまふ。特別な理由があるわけではないが、彼の半生を二つの風景が支配してゐた。一つは言ふまでもなく山岳であり、そして他の一つは、あのごもごもとした都會の雑踏であつた。この二つの中へ雑るとき、彼はただ、何といふこともなく確かに雑るといふ實感がして、深く身體の溶け消えてゆく狀態を意識することが出來るので